2018.6.16

○○中学校　第１学年　　社　会　科　通　信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.18

石器時代と古代文明の分岐点に金属器あり

1　時代の最先端の「道具」（刃物）で時代区分する

原始時代から古代文明までの時代は、その時代に使われた最も新しい刃物の種類によって時代区分するのが一般的です。そのように時代を分けるのは、その時代に使われた最新の技術・道具で時代の特徴を表し、歴史の変化を明らかにするためです。

その時代区分によれば、世界史的には、旧石器時代→新石器時代→青銅器時代→鉄器時代の時代順になります。すると、古代文明のおこった時代を区分するのは、どのような刃物(技術・道具)なのでしょうか。それが、青銅器と鉄器の金属器の製作と使用です。ですから、古代文明は青銅器時代の到来と同じ時期になるわけです。

ただし、日本の歴史では、旧石器時代→縄文時代→弥生時代の順になり、時代順は微妙に異なります。弥生時代に青銅器と鉄器が、大陸から日本に伝わったからです。

さて、青銅は銅とスズ(錫)の合金です。1000℃を超す高温で銅とスズを溶かして混ぜると、銅よりも硬い金属が出来ます。それが青銅です。青銅器を研ぐと鋭い刃物になります[*1]。青銅は年月を経ると緑青色になります。そのため、発掘された青銅器だけを見ると緑青色が青銅器の色だと思ってしまいます。しかし、新しい青銅器は、黄金色に輝く神々しい色をしていて、神を祭るための道具に用いられたことを容易に推測することができます。

島根県荒神谷博物館にて撮影

一方、青銅器は軟らかくて武器にむかないと言われます。けれども、青銅器は銅とスズの混合割合で硬さが変わります。このことは、古代中国ではすでに理解されていて、青銅器の使用目的別に混合割合が決められていたと考えられています[*2]。今日の研究によれば、古代中国で武器として使われた青銅器は、スズの割合がおよそ25％を超えています。つまり、武器として青銅器が作られ、使われていたのです。

たとえば、日本でも弥生時代の鳥取県青谷上寺地遺跡から、武器として使用された銅鏃（青銅器で作られたやじり）が大量に出土しています。

*1　ハンムラビ法典の§218では医師の手術道具として出てきました。「**なんでやねん**」No.8 p.6。
*2　村上隆『金・銀・銅の日本史』岩波新書 2007年 pp.76-77。

なお、不思議なことがあります。それは、青谷上寺地遺跡からは、青銅器よりも軟らかい、スズを含まない純度の高い銅で作られた鏃が、人の骨盤にささったままの状態で発見されたことです[*3]。鏃の形や研ぎ方、使い方も武器の性能を左右したようです。

しかしながら、やがて日本でも、青銅器よりも硬く強い鉄器が作られるようになると、青銅は武器には使われなくなります。

2 「古くなった技術・道具」は改良され使い続けられる

ところが、「最新の技術や道具」が使われるようになっても、それまでの技術や道具が完全に姿を消すことは滅多にありません。むしろ、少しずつ改良されて使い続けられてきたと考える方が正しいと思います。たとえば、金属の器が考案されても、粘土をこねて焼き上げる土器の製法は、今日の陶磁器に引き継がれています。土器は、今でも私たちの毎日の暮らしに欠かせない道具なのです。木のお椀を使っている家庭もあるでしょう。お椀は木器の代表です。餅つきに使う石臼は磨製石器です。

その視点を忘れると「**今日の技術や知識の基礎は歴史的に形成された**」ことを見失います。先人たちが私たちに伝えてくれたことをもっと発見したいと思いませんか。

3 歴史的「文脈」の中で「キーワード」を理解する （学習の仕方）

ノート点検をしていて、深く学ぶ前から、ノートに単語(キーワード)を赤色のペンで書き入れている人がとても多いことが見えました。たぶん、それにはテスト対策の「クセ」で、キーワードだけを覚えようとする強烈な意識を感じさせます。

しかし、歴史の学習を決定づけるのは「単語」ではありません。歴史学習で大切なのは、「歴史の流れ」を何が変えたのか、どのような人の働きが社会を大きく変化させたのかです。つまり、**歴史学習で大切なのは、「キーワード」を歴史的「文脈」[*4]の中で理解することです。ですから、自分が学習内容を理解してから、ノートの記述内容を赤色でマークするほうが、効果的な学習方法になるでしょう。**

私(倉橋)の授業で使用しているワークシートには、「矢印」や「囲み」を多く使っています。実は、その「矢印」や「囲み」が**「文脈」のポイント**なのです。**「文脈」を説明する際に、使うべき言葉が「キーワード」です。**勘違いしないでください。

---

*3 前掲、村上隆『金・銀・銅の日本史』pp.18-19。

*4 広辞苑では、「文中での語の意味の続きぐあい。文章の中での文と文との続きぐあい。比喩的に、筋道・背景などの意にも使う」と説明されている。